

# 研 究

## Staatsnation と Kultur-nation

中 野 清 一

—

Staatsnation と Kultur-nation<sup>1)</sup> とを區別しようとする見方がある。民族の集團としての存立が唯共同の政治的組織即ち國家を基礎としてのみ考へ得られる場合を Staatsnation と呼び、之に反して専ら文化の共同といふ事實の上に民族の概念が立脚してゐる場合を Kultur-nation と名づけようとする見方である。この見方は思想的には獨逸觀念論の哲學者特にフイヒテに淵源してゐるものと思はれるが、組織的にはノイマン及びキルヒホッフ<sup>2)</sup>によつて説述せられたものとして民族理論家の間に知られてゐる。

- 1) 白井二尙氏はこれに國家民族、文化民族といふ譯語をあててゐる。同氏論文、國民の概念(社會學年報、社會學、第二輯)、49頁。この譯語は譯語として正しいものであるが、日本語としてこれらの譯語のもつ多義性を惧れ本稿では一々原語のまゝ用ひることとした。
- 2) Fr. J. Neumann, Volk und Nation, 1888.  
A. Kirchhoff, zur Verständigung über die Begriffe Nation und Nationalität, 1905.

かやうな區別を施すに到らしめたものは數々の、争ふべからざる現實の事實であつたに違ひない。フイヒテが *Kulturnation* の概念を説かうとした時、彼の念頭には、當時の獨逸が未だ全體としての統一的國家をもつてはゐず、各地方が恰もそれぞれ獨立な國家であるかの様に振舞つてゐる現實が思ひ浮べられてゐたのであらう。かゝる現實を前にみながら、隣國佛蘭西における澎湃たる民族思想の勢ひに拮抗しつゝ、獨逸の民族的統一を説くためには獨逸における文化的統一の事實を措いて他に據るべきところは見出されなかつたに違ひない。又キルヒホッフはもともと民族の本質を共同なる國家への所屬のうちに求めようとした學者であつたが、國家的統一を有せずしてなほ民族たることを失つてゐない數々の現實、例へば幾度か國家的統一を失ひながらもその間なほ民族としての存在を保持しつゞけたポーランド民族の場合、又國家的統一の下に所屬せしめられながらも自らのみの範圍内における固有文化の共通性をよりどころとしてあくまで獨立民族である信念をすてないアイルランド民族の場合等々の現實は遂に彼をして *Staatsnation* とは異なつた民族類型としての *Kulturnation* の概念を措定するに餘儀なからしめたのであつたらう。

かやうにこの區別は現實に呼應しようとして考へ出されたものであつたに違ひないが、然しそれは又やがて現實の説明を屢々困難ならしめることにも役立つた。例へばアルサス・ロウレンスの場合の如き、獨逸の側からは *Kulturnation* の見方が一方的に強調せられることによつて獨逸への歸屬が力説せられたのであるし、之に反して佛蘭西の側からは *Staatsnation* の觀點のみが把持せられることによつて佛蘭西領たることが辨疏せら

3) A. Kirchhoff, Was ist national?, 1902, S. 32.

れたといふ様な現實解釋における紛糾を惹起してゐる。勿論この紛糾はその責任のもとづくところ、かの概念上の區別それ自體にあるのではなくして、この區別の一方のみを眞實として他方を斥けようとする様な誤れる用ひ方自體にあるといふ風に考へることが一應は可能である。けれどもアルサス・ロウレンスの場合の様に何れの側からも主張せられ得る様な場合はこの兩民族類型が部分的に重なり合つてゐることを示してゐるのであり、かゝる場合に兩類型のうちの一方のみの強調が可能になつてきたのは、かゝる場合に臨んでの充分なる用意がかの概念上の區別自體のうちに施されてゐなかつたためであるといつてよい。

一體 *Staatsnation* と *Kulturnation* との區別は歴史的性質のものなのであるか、それとも原則的性質のものなのであらうか。若し歴史的性質のものであるとするならばその間の歴史的經過は如何なるものなのか。又原則的性質のものであるとするならばこの兩類型の間には如何なる關係が見出されるか。兩者は單に並行の關係にたつものにすぎないか、それとも又原理的交錯の關係が認められるものなのであらうか。更に進んで問ふてみるのに、この兩類型の分け方は民族理論における客觀主義的立場にたつてのことと思はれるが、既に主觀主義的立場にたつことを主張したわれわれの立場からこれをどう解釋すべきであらうか。

## 二

順序として *Staatsnation* と *Kulturnation* とを歴史的範疇にすぎないものと考へた學者の説くところから聞

き始めよう。

先づクェルレン<sup>1)</sup>が思ひ浮ぶ。彼にとつて民族といへば *ein ethnisches Individuum* を意味してゐる。ところでかゝる一個體としての民族には、普通の個人におけると同様に、發展過程がある。「民族形成過程」である。この過程は、生物學的過程であるところの「合同」と「適應」から始まり、この過程の進行が文化的な力によつて推進せられる段階を経過して、やがて最終過程としての「人格」の成長にまでたどりつく。では發展の最終過程を現すこの「人格」の成長といふ事實は具體的にはどういふ形で現はれるか。客觀的な現はれと主觀的なそれとがある。一民族が自らに固有な言語をもつに到るといふのが前者であり、一民族が自らの固有性、自らの共同所屬性を内に對する關係においても外に向ふてのそれにおいても明瞭に自覺するやうになるといふのが後者である。このうち後者はいつてみれば「共同體感情」が出現したことを意味するのであるが、かゝる感情が出現した時に始めて民族は「一人前になる」。しかもかやうに「一人前」になつたその時に、こゝに到るまでの生物學的過程は政治的過程に推移してゆかざるを得ない。何故なら「自ら成人したと感ずる民族は同時に又成人したものであることを認められよう」と欲する」からである。だから民族は國家のうちにその確定形態を見出さうと要求する。かういふ意味においてクェルレンは結局國家的存在形態が民族の *Lebenssehnsucht* の到達點をなしてゐるものと理解し、かうみる立場から *Staatsnation* と *Kulturnation* との間には決定的な對立があるとみることができないとし、兩者は「目的において相即してゐる」と考へようとしてゐる。尤もクェル

1) Kjellén, *Der Staat als Lebensform*, 1916.

レンは民族から國家への發展過程の他に國家から民族への發展をも考ふべきであると説いてはゐる。しかしこの場合とても、さきの意味での發展過程を 'Aufwärtsstrom' 之に對してのちの意味でのそれを 'Abwärtsbewegung' とそれぞれ呼んでゐるところをみると矢張り一義的な發展系列は Kulturnation から Staatsnation へのそれであると考へてゐたことに疑問の余地はない。

クエルレンがこの兩概念の間には「決定的な區別」がないといつた時にはこの兩者の間に原則的な性質の區別がないことを指示したのであらうが、これと同じ考へ方をより簡潔な姿でハルトマンは次の様に展開してゐる。「Kulturnation」と「Staatsnation」との概念を恰も同權利であるかの様に並立させるのは間違つてゐる、事實は兩者は唯同一有機體の異なる發展段階なのである、後者は唯前者の 'Stadium des Auswuchses' なのである。<sup>3)</sup>」ウイザアも同様な見方を發表してゐる。彼は Staatsnation といふ言葉の代りに die politische Nation といふ言葉を用ひてゐるが、具體的な例をとつてみると伊太利民族は長い間 Kulturnation であつたがやがて politische Nation たるに到つたのであるし、獨逸民族についても又さうであつたといふ様に、この兩者の間には唯歴史的發展の關係のみが認められることを指摘した上で、「politische Nation は完成せられたる民族である、民族そのものである」と論斷してゐる。<sup>4)</sup> なほこの他に同じ様な見解を披瀝した有力な學者としてフェルスを擧げることが出来るがこれ以上特別に紹介しない。

さてこれらの諸學者の見解には共通なる二點が認められる。兩概念の間に原理的な決定的區別を認めること

- 2) Kjellén, a. a. O., S. 137.
- 3) L. Moritz Hartmann, Die Nation als politischer Faktor, Verhandlungen des zweiten Soziologentages, 1913, S. 82.
- 4) F. Wieser, Das Gesetz der Macht, 1926, S. 360.
- 5) J. Fels, Begriff und Wesen der Nation, 1927, S. 108 b.

はできないのであつて、唯歴史的段階を異にして現はれるところの歴史的範疇にすぎないとみることがその第一であり、歴史的発展は *Kulturnation* から *Staatsnation* へのそれであると考へることがその第二である。

第一の點から吟味を始めよう。なるほどこれらの兩概念にはこれを歴史的範疇のものとしてみることを許す一面があることは争はれない。假りに文化の共同を基礎として一民族が成立したと考へるとして、この形で存在に入つた民族はやがて政治的獨立を要求する様になりそれだけ國家の共同を基礎とする民族類型の方向へ推移してゆくことは一つの自然な歴史的傾向であるに違ひない。又當初から共同なる國家への所屬の上に立脚しながら民族としての獨立なる存在を發足せしめた一民族がやがて文化における共同を作り出しつゝ、この點を基礎としての民族類型の方向へ動いてゆくことも考へられる。けれども兩概念を唯専ら歴史的發展段階をのみ現してゐるにすぎないとみることが果して許されるであらうか。そもそもこの兩者を發展史的概念とみてゆくといふこと自體がこの兩者のうちに含まれた意味含蓄を十分に味到してゐないことの結果なのではないか。すでに他の稿において論じておいた<sup>6)</sup>様に廣義の民族の概念には區別さるべき二つのものが含まれてゐる。一は傳統的民族、他は理念的民族である。他の學者の表現を籍りてくるならば狹義における民族と所謂近代民族とである。一は共同なる感情が過去からの傳統を中心にして結束せられる場合に現はれてくる民族類型であるし、他は共同なる意志が將來にわたつて設定せられた理念に向ふて集中せられてくる場合に現はれてくる民族類型であると考へられる。この二つのものゝ區別は歴史的分類としてのみ考へらるべきものではなくして、歴史的

6) 拙稿、民族及國民の本質（小樽高商二十五周年記念論文集），132頁以下。

には場合々々の状態に應じて何れかの一面がより強く強調せられるといふ形で現れてくるところの、民族概念における原理的な二つの契機であるともみなければならぬ。こゝにいふ場合々々の状態が如何なるものであり、又これに應じて各々の一面が如何にして強調せられるかについてはこの稿の後半において論ずるとして、今の場合に注目しつゝあるのと同じ事情が *Kulturnation* と *Staatsnation* との兩民族類型の場合についても又窺はれるのではないか。歴史的にはその具體的な情勢の如何に應じて文化における共同といふ契機がより強く強調せられ、異なつた情勢の下においては國家を共同にもつといふ契機がより強く表面に現れるといふ様に、この兩類型は原則的な兩契機として民族概念のうちに含まれてゐるものと考へることが許されるのではないか。例へばスイスの場合の如き、「スイスはドイツの一地方である、尤もこれは政治的意味においてとはなく文化的意味においてにすぎないが」といつた一獨逸人の發言に關聯して獨逸系スイス人はいたく激昂したといふ事實をキルヒホッフは傳へてゐるが、この激昂の背後には勿論スイス民族は共同國家に所屬することに於て民族としての獨立存在をもつといふ信念がひそんでゐること、想像に難くないとして、かゝる信念の背後には更にこの國家への共同所屬を通して過去の文化共同（勿論この場合の文化共同はスイスの各地方における文化共同に比して統一性の濃度を異にしてはゐるけれども）についての衿持がひそんでゐなかつたであらうか。若しかゝる衿持が共同國家といふ信念の底にひそんでゐたとするならば、これは場合々々の状態に應じて何れかの一面がより強く強調せられるといふ事實を物語つてゐるものであり、これは又それだけかの兩類型が

7) Kirchhoff, a. a. O., S. 28.

原則的なる二契機をなしてゐることを證左してゐるものと言はなければならない。又當初から共同なる國家への所屬を契機として成立し始めた一民族例へば北米合衆國民族がやがて又アメリカ文明といふ呼稱をもつて誇示せられる文化統一を云々し始め、この點に立脚しての民族の獨自性が主張せられるといふのも *Kulturnation* が *Staatsnation* とは原則的に異なつた一契機であることを立證してゐるのではないか。クエルレンは民族から國家への *Aufwärtsstrom* の他に、國家から民族への *Abwärtsbewegung* があるとみてもゐたこと既に紹介した如くであるが、今姑く上向とか下向とかいふ様に事柄を無理に發展系列的にみることを中止して、クエルレンの言はんと欲した中心的なもののみをひきだしてくるならば民族から國家への發展と共に國家から民族へのそれも考へられるといふことになるに違ひない。而してこゝでクエルレンが民族といふ言葉の下に意味してゐるのは *Kulturnation* のことであり、又國家といふ言葉の下でのそれは *Staatsnation* を指してゐると理解することが許されるならば、この兩方向における動向が窺はれるといふことはそれだけこの兩類型が原則的なる二契機を區別したものであることを意味してゐるのではないか。曾てマイネッケはこの兩類型に關聯して次の様に説いたことがある、「ある *Kulturnation* が、何等かの政治的作因の協力なしに、純粹に、全く共同の文化のみから成立しうるかは疑問である。△國家以上の民族であることはできるが國家なき民族であることはできない△といふダアルマンの言葉（政治學、第三版、三頁）は、よし行き過ぎてはおれ、つくべきところをついてゐる。例へば伊太利的 *Kulturnation* の成立にはローマ帝國への追憶や又法王制やローマ教會のもつ政治



的側面が協力してゐる。同じ様に、これと反對の *Staatsnation* も又何等かの宗教的作因の協力なしには成立し能はない。」このマイネッケの敘述はかの兩類型が單なる歴史的類型に止つてゐるものではないことを證明してゐるものと考へられる。なほこのマイネッケの言葉のうちにはこの兩類型に關聯して考ふべき問題の所在についての暗示が含まれてゐるがこの點については後にふれる機會がある。

第二の點の吟味に轉じよう。クエルレンもハルトマンもウイザアも發展は *Kulturnation* から *Staatsnation* へのであると説いてゐるが果してそうとのみと考ふべきものであらうか。 *Kulturnation* がやがて *Staatsnation* へ發展せずにおれないであらうことは充分に考へられる。然しその反對に *Staatsnation* がやがて *Kulturnation* に向つて動向することも同じ自然的な勢ひとして考へられるのではないか。一概に文化における共同とはいつてもこの共同には段階的に種々なるものが考へられる。全文化の範圍にわたつて全民族成員について完全なる共同が成立するのは理念的限界においてのみである。現實における過程はこの理念的限界に對する接近の度合において様々なる段階を示してゐるものと思はれる。若しさうであるならばある一定の度合における文化の共同が政治的共同を意慾する段階に入つた後には、この政治的共同を基礎として、より進んだ度合における文化の共同に向つて進展してゆく場合が考へられるのみでなしに、かように經過してゆくといふことが一般的な場合であるとみななければならぬであらう。又他方から考へてみると、一概に政治的共同とはいつても文化における共同と同じ様に量的にも質的にも様々な階梯が考へられる。完全な意味における政治的共同

8) F. Meinecke, *Weltbürgertum und Nationalstaat*, 1911, S. 3, 脚註

が成立するのは矢張り遠い將來においてのことに違ひない。若しさうであるならば文化的共同が政治的共同にまで發展した後に再びより高次の文化的共同に向つて動いてゆく様に、この後には再びより高次の政治的共同へと發展してゆくといふ様に、事柄は相互に相互を誘ふてゐるといふ形になつてゐるのではないであらうか。かように發展において相互牽聯的であるといふのは、いふまでもなく第一の點の吟味の時に述べた様に、この兩類型が原則的意義における二契機をなしてゐることの當然の歸結なのである。

### 三

Staatsnation と Kulturnation との概念上の區別のうちには單なる歴史的意義以上の、原則的なる何ものかがひそんでゐることに着眼して、精密な分析を企てると共に兩概念の間の關聯についても若干の本質的な事態を指摘し忘れなかつた殆んど唯一の學者としてわれわれはクルト・スタアフェンハアゲン<sup>1)</sup>の名を想起する。以下暫くの間、このわれわれの國では殆んど誰れもが注目してゐないといつていゝ優れた民族理論家の説くところに耳を傾けながら、われわれ自身の積極的見解を展開するための手掛りを作つてみたい。

スタアフェンハアゲンは何よりもまづ Staatsnation と Kulturnation とを區別することがこのまゝの形では決して充分ではないことを認めてゐる。しかしそれにも拘はらず民族の本質を明らかにしようとするに當つてはこの區別を全く無視して過ぎることはできないといつてゐる。何故であらうか。この區別の意味するところ

1) Kurt Stavenhagen, Das Wesen der Nation, 1934.

は、唯單に外面的な理由から企てられた諸徴表を指してゐるのではなくして、實は「共同なる自己意識の内在的な要素」を現してゐるのであり従つて又「實在的な契機」を示してもゐるからである。この兩範疇の根柢に横はつてゐるところの國家と文化とは「存在的な、拘束的な、而して外に向つて活動するところの自己意識の基礎<sup>2)</sup>」なのである。この兩範疇は二つの類を現してゐるのではなくして實は「生の形式」を現してゐる。科學的な範疇ではなくして存在的なそれである。だからこの兩者の區別を全く無視してゆくといふことは「存在形象」から眼をそむけるといふことに他ならない。

だが然しこれらの存在的な區別はそのまゝの形では充分にその眞意を傳へてゐるとみることにはできない。スタアフェンハアゲンはかう考へながら一應なぜさうであるかを次の様に説明してゐる。Kulturnation から考へてみる。例へば言語の共同を基礎として民族の成立が考へられると普通にいふ。然し若し言語に民族形成的な力があるものであり、共同體感情が言語に結びついて現れるものであるならば、同一言語を使用しながら何故二つのアングロサクソン民族が存在してゐるのであらう。ノールウェー人とデンマーク人は同一の言語を語り、これを基礎に同一の文化を所有しながらもなほ二つの異なつた民族であるのは何故であらう。これらの事實は共同なる言葉それ自らが民族形成的に働くのではないことを示してはゐないか。民族形成的に働くものを求めようとする場合、言語にいくらかでもかゝる働きが認められるとすれば、それは言語それ自體がかゝる働きを營んでゐるのではなくして、この言語のなしつゝある特殊なる役割自體に重點があるとみななければなら

2) Stavenhagen, a. a. O., S. 3.

ぬ。共同の言語といふ事柄それ自體ではなくして、この共同の言語は實は、これから獨立な、ある共同性の表現にすぎないのであり、この後者にこそ民族形成的な働きを求めうるのであつて、このものの單なる表現としての言語の共同それ自體にかゝる働きがあるのではない。一般的にいふならば文化の共同といふ場合、人々の着眼は唯表面的な事態のみに向けられてゐるのであつて、この表面的な文化の共同の背後にひそむものかが民族形成的な作因として活動してゐるのである。若しかう考へることが許されるならばわれわれは *Kultur-nation* の背後にひそむものにもまで分析を進めてゆくべきである。これと同じことは今一つの範疇である *Staats-nation* についても言ふことができる。この概念をもち出した時、人々は共同なる地域的支配團體を基礎として民族の存立があると考へようとする。けれども、恰も共同なる言語が支配してゐるといふことは内面的な關係を全く示してゐないところの純外面的なことがらを指してゐるにすぎなかつたのと同じ様に、國家的協力といふことそれ自體は未だ國家成員自體の内面的結合を現はしてゐるとはいへない。國家への共同所屬の背後に本質的な何ものかが存在してゐるのであつて、この本質的な何ものかの「表現」として國家への所屬が考へられてゐるのである。若しさうであるならば *Staatsnation* の概念もその根基にまで立入つて分析を進めることが要求されてゐるところの表面的な概念にすぎないといつてよい。<sup>3)</sup>

では *Kultur-nation* の場合にも *Staatsnation* の場合にも、文化なり國家なりの共同の背後にひそんでゐると考へられたところの、そして又これに對する關係において文化なり國家なりの共同が單なる「表現」として理

3) Stavenhagen, a. a. O., SS. 3-19.

解せられてゆくところの、本質的なる何ものかとは一體何か。

この問題に積極的に答へてゆくためにスタアフェンハアゲンは結合形態についての若干の社會學的論議を準備してゐる。こゝでは結合形態そのものを論ずるのが目的ではないから當面の問題に必要な範囲内で紹介してみる。人間の關心には二種類のものがある。一は「自己的な、固有の自我強調を伴つてゐる様な關心」であり、他は「對象への無關心的な、沒我的な參與」である。この關心の區別に應じて二種類の結合形態が考へられる。前者に呼應するものは利益社會であり、後者のそれは共同社會である。ところで問題はこゝからさきにある。共同社會がそれに呼應してゐるところの「沒我的關心」とは「聯帶性」のことに他ならないが、この聯帶性には二つの全く異なつた形態が考へられるし、且つこの二つの異なる聯帶性の形態に應じて二つの異なつた共同社會の形態の區別が考へられる。第一種類の聯帶性は次の如きものである。聯帶性が「價値的世界全體」に對する關係において成立する。價値的世界に對して沒我的關心が寄せられてゐる場合である。次に第二種類の聯帶性は價値的世界それ自體に對する關係においてではなく、向ふところの人それ自體に對する關係において成立する。こゝでは沒我的な關心が相手のいはゞ「より外面的な領域」に寄せられてゐる。さてこの様な聯帶性の二種類には二つの異なつた共同社會の類型が呼應してゐる。第一種類の聯帶性に呼應するものは、價値的世界に對する關係を共同にもつことによつて互ひに一體であると感ずる如き共同社會である。又第二種類の聯帶性に應ずるものは相手方の「かくかくある」といふこと自體に沒我的な關心を向け、これによつて相

手方と一體であると感ずる如き共同社會である。さてこの二種類の異なつた共同社會の類型にそれぞれ名稱を與へるならば前者は精神的共同團體であり、後者は環境共同體又はプラグマチツシエ共同體である。<sup>4)</sup>

これだけの準備を整へた後でスタアフェンハアゲンはいふ、「精神共同體とプラグマチツシエ共同體のなかにこそわれわれが探し求めた中核形象があるのではないか。少くとも精神共同體から、言語共同體としての、文化共同體一般としての民族へは容易に架橋ができるのではないか。」<sup>5)</sup>かくして彼は精神共同體と Kulturnation との關聯を次の様に規定してゆく。精神共同體といへば價値に對する立場構への點でお互ひに一體と感ずるところに始めて成立する。しかし翻つて考へてみるのにこの點で一體と感じうるためには他人の立場構へが何等かの形で知られてゐなければならぬ。若し多くの人々を人間的に一般には知つてゐないとしたら、この必要なる前提は何によつて充されうるのであらうか。この困難な問題は、若し感情傳統といふ様なものが存在しており、一つの時代が次に來る時代に、價値に對しての共同な立場構へを傳へてゆくことができるものであるとしたならば、容易に解ける。感情傳統があるならば、別に人々は親身に他の人々に接し得なくとも、この傳統のうちにあつて他の人々との一體感をもつことができるに違ひない。ところで普通によくいはれる様な思惟傳統と同じ様に感情傳統も又あるといつてよい。理論的思惟、概念によつての理論的世界把握の傳統と同じ様に、價値に對する立場構への傳統はあるとみななければならぬ。例へば勞働者の資本家に對する嫌惡、バルト人のロシア人に對する嫌惡、獨逸の知識階級がゲーターに寄せる尊敬等は感情傳統の存在を物語つてゐる。だが然し勿

4) Stavenhagen, a. a. O., S. 46.

5) ditto, a. a. O., S. 48.

論この様な意味での感情傳統があるといふだけでは未だ精神共同體の概念は生れてこない。前者から後者が出現してくるためには一定の價値に對する立場構への傳統的共同が自覺に上つてこなければならぬ。「多くの人々が、同一の傳統的な價値感情の様式をもつといふこと——又は同じことだが——存在的に同一なる志向的價値世界に關はつてゐると感ずることを土臺として、傳統的に、即ち彼等の存在的な我々理念について、明らかに一體であると知る時に、一定の精神共同體が作りあげられてくる。」<sup>6)</sup>ではこゝに規定された様な精神共同體と Kulturnation との間には如何なる關聯が見出されるか。言語共同體として民族を考へる場合についてみよう。言語を共同にもつといふのは母國語を共同にもつといふことであるだらう。ある言語が母國語として受けとられるといふのはこの言語のうちに共同體の「感情様式」が明白に現はれてゐるからに他ならない。傳統的な感情共同こそが言語共同の背後にひそんでゐるとみななければならぬ。より一般的にいふならば何れの種類の文化の共同とはいつてもその背後には傳統的な感情共同がひそんでゐる。文化の共同はこの傳統共同の表現形態であるにすぎない。前者は後者の「表彰的象徴」として存在する。若しさうであるならば文化の共同を基礎としての Kulturnation の背後には、感情傳統を基礎としての精神共同體としての民族の概念が横はつてゐると考へなければならぬ<sup>7)</sup>。

では残されてゐる今一つ概念であるところの Staatsnation の背後には何が横はつてゐるか。この場合にも、文化共同體におけると同じ様に、國家への所屬を「表現」たらしめてゐる、より本質的な何ものかがある

6) Stavenhagen, a. a. O., S. 61.

7) Stavenhagen, a. a. O., SS. 48-97.

のではないか。一見すれば國家も又精神共同體に屬してゐるかの様に考へられる。なるほど Staatsnation は部分的には精神共同體となるに到つてゐる。國家的組織が一つの價値的世界として眺められる一面が争はれないものである限り、かゝる價値的世界への立場構への共同を基礎として精神共同體が成立し得ない筈はない。しかし國家なりその組織なりが多くの人々の存在的自己意識のうちに營んでゐる役割を考へてみる時、國家は先づ精神的一體存在の表現として眼に映じてくるのではなくして、第一には「正義公正の楯、安寧福祉の推進力」として眺められる。ところでかゝるものとしての國家の本質に迫つてみるのに、國家が一定の機能を果たすために一定の權威をもつて成員の上に臨むことができるのは、この國家独自の權力の故ではなくして次の様な二つの條件の下においてであるに違ひない。即ち先づ第一に各成員はブラグマチツシエ共同體の、お互ひに對して又全體に對して責任を負ふてゐるところの構成員であると感じてゐることであり、第二には國家的組織が共同體の存在的自己意識のうちに於て固有なる表彰的象徴として眺められてゐるといふことである。かくして共同なる國家への所屬の背後には、相互に相互を相互の故に愛しつゝ結びつくといふブラグマチツシエ共同體の姿が横はつてゐるとみななければならぬ。丁度、ある言語、そのうちに共同體感情が明白である様な、ある言語を母國語として感じ得るためには先づ以て精神共同體の一員として感じなければならぬのと同じ様に、國家とその組織、そのうちに共同の責任が客觀化せられてゐるところのこれらのものを「われわれのもの」としてうけとり得るためには、これに先立つてブラグマチツシエ共同體の一成員たることが感じられてゐなければな



らないであらう。<sup>8)</sup>

スタアフェンハアゲンは以上の様に *Kulturnation* の背後に精神共同体を、又 *Staatsnation* の背後にプラグマチッシェ共同体を見出した後で、この原則的意義において對立せしめられた二つの共同体類型の間に存在するところの相互關係の説明にまで進んでゐる。

先づ精神共同体の側から考へてみよう。既に述べた様にこの種の共同体は感情傳統において一體であると感じた時に成立する。ところでこの感情傳統が、例へば他の民族に屬する人々によつて何等かの形に於て壓迫せられ始めた時、人々は自らの感情傳統を操守しようとして努力し始める。かうなると、同じ感情傳統につながる人は「敵對的な環境」を共同に見出す様になり、この共同の環境に對する關係において相互に對して相互責任の感じを覺えざるを得ない様になつてくる。この時既に精神共同体はプラグマチッシェ共同体に轉移し始めてゐるといつてよい。一般的にいふならば精神共同体への共同なる所屬が一つの環境として感じられるに及んで、この環境に對する關係によつてお互ひの上に相互的な責任を感じ合ふところの環境共同体としてのプラグマチッシェ共同体が現はれ始めるとみることが出来る。

又プラグマチッシェ共同体について考へてみるのに以上のとは逆の方向においてこの共同体の精神化、從つて精神共同体への接近が親はれる。一體プラグマチッシェ共同体にあつて相互に相互的な責任がもたれ得るといふのは唯「狀態」なり「環境」なりについての共同にして同一なる評價、把握の下にのみ可能である。してみ

8) Stavenhagen, a. a. O., SS. 98-107.

るとプラグマチッシェ共同體成立のためにはその前提として、志向的價值世界における共同性が與へられてゐなければならぬことになる。同一なる價值形象の下に人々が把握すればこそこれらの人々にとつて環境なり狀勢なりが同一のものとしてうけとられ得る。尤もプラグマチッシェ共同體が、精神共同體の様に、價值感情の共同性といふ條件に結びつけられてゐるといふことは決して價值感情の共同性を基礎としてプラグマチッシェ共同體が成立してゐるといふ意味ではない。價值感情の共同性はプラグマチッシェ共同體に對して唯前提となつてゐるだけであつて、その構成契機をなしてゐるものといふわけではない。ところでこのプラグマチッシェ共同體の前提としての價值感情の共同性が發展せしめられて精神共同體へと接近してゆく。相互に相互的責任をもつといふ共同感情が、この共同感情のよつてもつてなりたつ前提としての價值感情における共同性を次第に表面に押出すといふ形で接近がみられてゆくのである。<sup>9)</sup>

轉じて若干の吟味を、以上の如きスタアフェンハアゲンの解釋の上に加へてみよう。

Staatsnation と Kulturnation との概念上の區別を「純粹社會形態」としてのプラグマチッシェ共同體と精神共同體との區別にまで分析を進めて行つたスタアフェンハアゲンの努力はたしかに注目し値する。けれども彼が分析の結果落ちついたところのプラグマチッシェ共同體と精神共同體との概念には若干の疑義がある。この何れの共同體にせよ、それぞれの具體的形態としては何も民族のみに限られてはゐない筈である。既にスタアフェンハアゲン自ら家族の如きを前者の他の例として、又宗教團體の如きを後者の他の例としてあげてゐる。<sup>10)</sup>

9) Stavenhagen, a. a. O., SS. 110-120.

10) Stavenhagen, a. a. O., S. 27. u. S. 119.

若し民族以外にもこれらの共同體の類型に所屬するものが見出されるとするならばこれらのものから特に民族を區別せしめる所以のものは何處に求められることとなるのであらうか。彼はこの點の區別を民族のみが、<sup>11)</sup>る共同體類型のうちでもわけても全體的共同體であるといふことに於て施さうとしてゐるかの様に見受けられるが、若しかように試みようとするのであるならば何故に民族のみ全體的共同體であるか、先づ説明されなければならぬであらう。この點が如何に説明せられるにせよ民族のみに歸屬する特有性はプラグマチツシエ共同體といふ概念のうちにも、はた又精神共同體といふ概念のうちにも與へられてゐないといふことだけは指摘しうる。若しさうであるならばプラグマチツシエ共同體なり精神共同體なりにまで分析を進めることが假りに正しいとしても分析は更らに今一步前進せしめられることを要求されてゐるといはなければならぬ。翻つて考へてみる。精神共同體といふ場合、スタアフェンハアゲンは傳統感情における一體性が感じられるときにこの種の共同體が成立すると考へてゐる。しかし傳統感情における一體性として感じられるためには如何なる條件の存在が必要であるかの問題に着眼してゐないかに思はれる。クェルレンは民族の、自らの固有性についての自覺は、丁度火花から焔が發する様に、突如として出現することを説いてゐるが、<sup>12)</sup>スタアフェンハアゲンも又これと同様の事態をしか思ひ浮べてゐなかつたのであらうか。精神共同體が最後の落ちつきどころであるといひきるためにはこの點の分析が是非企てられなくてはならないであらう。又プラグマチツシエ共同體といふ場合、彼はこゝにおける共同性が價值把握における共同性を前提にしてはゐるけれども、それは唯前提

11) Stavenhagen, a. a. O., S. 69 f.

12) Kjellén, a. a. O., S. 124.

として依存してゐるだけであつて、この價值感情の共同はこの種共同體の構成的契機ではないと論じてゐる。けれどもかう理解されてゐる限りに於ては價值把握の共同性といふことはプラグマチツシエ共同體の結局本質をなしてゐるといふことになりはしないであらうか。プラグマチツシエ共同體の直接の本質は相互的責任感の共同把持といふことに求められてはゐるけれども、この直接の本質としての共同把持そのものが價值感情における共同把握を前提としてのみ可能であるとするならば、結局プラグマチツシエ共同體の最後のよりどころは價值感情における共同性のうちにあるといふことにならざるを得まい。これを唯「本質契機」と「前提」といふ言葉の使ひ分けによつて區別しようとするのは無理であるといふことにならう。若しさうであるならば「純粹社會形態」として原則的に互ひに區別された二つの概念のうち一方の精神共同體が他方のプラグマチツシエ共同體の本質をなしてゐるといふ奇異なる結果に導かれてくる他はないであらう。而してこの奇異なる結果が導かれてきたのは一に、謂ふところのプラグマチツシエ共同體の概念の分析そのものがゆきつくすところまでゆきつくしてゐなかつたからであるとみななければならぬ。一體人々が他の一定の人々と共に相互的責任感を通して共同體を作るといふことはこの共同體の存在を何等かの意味において他の異種共同體に對しての獨自性をもつものとして感ずることを別にしては可能ではない。一民族の成員が同一民族の成員とプラグマチツシエ共同體の關係に入り組んでゆくのは他民族における他種共同體とは異なつた價值を自らの集團範圍において認めるがために他ならない。この一定群の人々との結合を特別に價值的に異なつたものと感情する態度が共同であ

ればこそ特別なる共同体が成立してゐるとうけとられるのであつて、唯結合に入る人々のその人々の故にのみこの種の共同体を作りあげてゐるものと考へることはできない。この意味においては精神共同体に他ならないことになる。勿論スタアフェンハアゲンが精神共同体と呼んだところのものと、このプラグマチッシェ共同体といふ形での精神共同体とは全く同じものであるとはいへない。共同なる精神態様の向ふ方向が兩者の場合において異なつてはゐる。如何に異なつてゐるかは後に説くとして、若しかうみることが正しいならば精神共同体とプラグマチッシェ共同体との區別は實は精神共同体そのものゝ二類型を現してゐるものに他ならないといふことになつてくる。かくして Kultur-nation と Staatsnation との背後に横はつてゐるものは精神共同体とプラグマチッシェ共同体ではなくして精神共同体そのものゝ二類型であるといふことになるであらう。

スタアフェンハアゲンの見解についてはなほ吟味さるべき點が残されてゐる。然しわれわれはこゝで轉じてわれわれ自身の見解を積極的に述べる機會を捉へることにする。吟味し残された點については必要のある限り後に適當な箇所できりあげることにした。

#### 四

凡そ如何なる類型の民族が考へられるにせよ、民族の名を以て呼ばれる以上は、それらのすべてに共通して

現れる基本的な特徴が一つある。民族の名を以て呼ばれるこの特定集團の特殊價值についての動かすべからざる確信が恒にあるといふことである。民族は内に對する關係においても外に對する關係においても限界集團として感得せられる。いなむしろ積極的にいふならば限界集團としての性質がこの集團の内面からくる規定作用と外面からくるそれとが相合するところに思ひ浮べられてくるのである。内にあつて外に溢れようとするものゝための限界であると共に外にあつて内に侵し入らうとするものからの限界でもある。しかしこの二つの方  
 向に對して感得せられる限界性のうち、強度の點においてより優れてゐるとみられ得るものは外に向つての、又は外からのそれである。内にあつて外に溢れようとするものゝために限界的であらうとする氣組の根底には外に向つて、又は外からの限界であらねばならぬとする立場構へが豫想されてゐるし、かういふ意味においては外に向つての限界性のもつ強度が強からざるを得ないに違ひない。自らに對立する外なる集團がいくつかある。内から溢れでゝ外に赴かうとする傾向は直ちにこの、自らに對立するところの、外なる集團に聯繫してゐる。さうである以上、内から溢れようとするものゝために限界性を主張し得るためには外からの、外に向つての限界性を先づ確立するか、又はこれをより強固にしておくことが要求される。尤も一樣に外なる集團とはいつでも一通りではない。三種類のものが考へられると私はかつて説いておいた<sup>2)</sup>。世界集團、國際的集團、他の民族集團が即ちこれである。この三種類のうち第三のものに對する關係において外に向つての、外からの限界性は最もよく強調せらるべき理由がある。限界性が限界性としていよいよ熾烈に感得せられるのは二つ又

1) 拙稿、民族と階級（社會學年報、社會學、第五輯春季號）、114頁。

2) 拙稿、民族集團に於ける統一の概念（商學討究、第十三卷上冊）、94頁以下。

はそれ以上の限界性が相互に影響を及ぼし合ふ場合であると考へ、且つこのような形での相互影響は唯又は最もよく他の民族集團に對する關係において現はれる筈であると考へると、外なる集團のうち、わけでも第三種類のものに對する關係において、對外的限界性が最も強く感得せられるであらうことが容易に納得される。若しさうであるとすれば、あらゆる民族の類型に通じての共通な基本的特徴であるとさきに指摘したところの、特殊價值についての不動の確信をもつといふ氣構へは他の民族集團に對する關係において最も熾烈ならざるを得ないに違ひない。特殊價值といへば色々の方向において考へられはする。この民族集團の圈内にあるところの、數多くの、私のいふ第二次的部分集團<sup>3)</sup>わけでも階級集團に對する關係において、又世界集團に對する關係において、更らには又國際的性質を有する集團に對する關係において、最後には他の民族集團に對するそれにおいてといふように様々な場合が考へられはする。このうち最後の方面において特殊價值についての衿持が最も強烈であるといふのである。なほこゝで一步を進めて考へておかねばならぬことがある。以上の敘述では唯特殊價值の衿持と民族間の對立との關係を、後者がみられる場合に前者が最も強烈であるといふ側面から規定してみたに過ぎなかつたが、一體存立において前者がさきであるか、後者がさきであるか、それともその何れでもあるか、問題として思ひ浮べられる。本質的聯關の角度からこの問題を考へると兩者はその存立において同時であるといふの他はない。特殊價值の存立は他の民族集團との對立があつて始めて可能であるし、反對に又この對立は特殊價值の存在を豫想してのみ考へられる。かつてマックス・ウェバーは民族間の「異教徒的對

3) 拙稿、民族及國民の本質、110頁。

立」の背後には恒に「選ばれたる民族」といふ觀念がひそむと指摘した<sup>4)</sup>一方では *Abstozung* (反撥背反)こそ第一のものであるとも記して<sup>5)</sup>おり、一見すればその間に矛盾があるようにみうけられるが實は何れも共に眞實をいひ現してゐるといはなければならぬ。

この特殊價值についての共同なる確信は二組の、それぞれ異なつた領域における努力を誘つてくる。その一組はより組織的なる領域において現はれ、他の一組はより誇示的なる領域において現はれる。一は組織づけようとする努力であり、他は誇示しようとする努力である。特殊價值についての確信を基礎づけ秩序づけようとするのが前者であり、この確信を先づ見せようとするのが後者である。これらの二組の努力は何れも二種類に區別して考へられる。先づ前の秩序的努力はより多く精神的な側面においてみられることがあり、又より多く現實的な側面においてなされることがあるといふように二側面又は二種類がみられる。より多く精神的な側面での秩序的な努力といふのは特殊なる精神的資財の點での統一を確立しようとする心組である。統一的なる言語、統一的なる道德、統一的なる生活態様等々總じていふならば統一的なる文化をもたうとする努力である。之に對してより多く現實的な側面での努力といふのは特殊なる形而下的資財の點での統一をもたうとする氣構へである。統一的なる政治的組織、統一的なる經濟的組織、統一的なる地域的區劃等々總じていふならば統一的なる外部生活をもたうとする努力である。又後の誇示的努力はより多く確保的な側面においてみられることがあり、又より多く宣揚的なそれにおいてみられることがある。ヘルツはかつて民族の理念の内容を細

4) Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1925, S. 221.

5) ditto, S. 216.



かに分析して一、統一、二、自由、三、特殊性、四、妥當といふように列挙したことがあるがこゝにいふところの、より確保的な側面といふのはヘルツのいふ特殊性の概念に相當してゐるし、又より宣揚的な側面といふのは同様にヘルツの場合の妥當の概念に相應してゐるとみてよい。勿論この區別は極めて相對的のものである。事實の場合においてはその何れに屬するか容易に見定め得ない場合があるであらうけれど理論的にはこれだけの區別を施すことが可能である。

この二組の努力は、しかし、それぞれ單獨に存立してゐるものとみられてはならない。密接な相互影響の關係がその間には横はつてゐる。誇示的な努力がなされ得るためには先づ秩序的な努力がなされなければならぬ。しかしこの反對に組織的な努力が努力として發足しうるためには誇示的な努力が存在してゐなければならぬ。誇示せんがために組織づけるのであるし、組織づけようとして誇示するのである。この兩側面の相互的關係のうち、いはゞ民族の理念が一步一步充實せられてゆくとみてよい。アルフレッド・ウェバーは今の時代の民族對立を、かつての民族移動が外面的であつたのに對立せしめて「内面的民族移動」の姿をいみしてゐるものと考へようとしたが、いふところの内面的民族移動といふことが民族理念の實現といふことであるならば、その具體的な過程は以上の様な二組の努力が相誘ひつゝ成長することのうちにこそみられるといつてよ。

以上の敘述において、特殊價值についての不動の確信から淵源してくるところの結局四種類の共同なる努力

- 6) F. Hertz, Zur Soziologie der Nation und des Nationalbewusstseins (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 65, 1931), S. 19 f.  
7) Alfred Weber, Kulturgeschichte als Kulturosoziologie, 1935, S. 400 f.

をとりだしてきたが、こゝで立入つて考へておかねばならぬ今一つの問題がある。この四種類の努力は相互に影響し合ふ關係にたつものではあるが、本質的關係において、換言すれば、この努力がその中でなされてゆくであらうところの現實環境との關係において、より中心的な努力がありはしないかといふことである。これらの努力は相互に相互を誘ふ關係にたつてはゐる。この意味においては何れが先きに立つべきものであるかはいひ難い。論理的には同權であると形容してもよい關係にある。しかし現實の狀勢に對する關係からして他に先立つて先づなさるべき努力の存在が考へられる。他の努力に、それらがよつてもつて有効適切になされうるための、適當な地盤を供するといふ意味において中心にたつ種類の努力が考へられる。それは第一組の努力のうちの第二種類のもの、わけても統一的なる政治的組織をもたうとする努力である。統一的なる文化をもたうとする努力も、又かゝるものがすでに興へられてゐるとするならば、これを維持しようとする努力も、民族的なる獨自性を或ひは確保し或ひは宣揚しようとする努力もすべてはこの統一的なる政治的組織への努力なしにはよるべき地盤をもたないことになつて終ふに違ひない。現實の興へられたる狀勢は一定の確固たる政治的組織を有する民族の存在を示してゐる、かゝるものが存在する限り、これに對する關係において有効に他の努力をなしうるためにはまづもつて自らも又統一的な政治的組織をもつことが必要であるのは當然であるといはなければならぬ。現實的な意味においてはたしかに政治的統一といふ理念は民族のかゝげうる理念のうちで中心的地位にたつことが要求されてゐる。唯然しこのことはあくまでも現實的意味

に於てはあつて本質的觀點からではないことを牢記しておく必要がある。政治的統一といふ具體的理念が民族のうちに本質的に含まれてゐることは疑へない。しかしこの具體的理念が中心的地位にたつといふことは本質的なことがらではない。いはゞ便宜的意義においてのみこの具體的理念が中心的な地位にたつ。

## 五

その間に、或はその上に何等の積極的統一的秩序も存せざる姿のまま相對立する一定群の人々の集團がある——これには二種類のものがある、一は現實的なるもの、他は觀念的なるもの——何れにせよこの兩者は個人にとつて集團的安全感の確保せられる限界をなしてゐるといふ意味において共に限界集團に屬してゐる——しかしこのうち現實的なる限界集團はその現實的體制の故に限界性の與へる價值感が、觀念的なる限界集團の場合に比して薄い——觀念的なる限界集團は觀念的なものであればこそすべての理念的内容を結びつけて考へることを許す——これだけの理由でこの觀念的な限界集團には、特に維持せらるべく且つ伸長せらるべき價值が固有してゐる様に思はれてくる——しかもこの限界集團の外にはこの限界集團の存立を脅威する他の限界集團が存在してゐる——かゝるものが外にあるといふことは唯それだけの理由で、よしそれが現實に自らの存在を脅威してはゐなからうとなほ脅威しつつあるものとして受けとられる。世界集團と呼ばれるものが統一的積極的秩序を未だ所有してゐない限り、他の限界集團との關係は恒に現實的にせよ可能的にせよ反撥背反のそれで

ある他はない——この反撥背反の關係は一定の限界集團に固有のものとして感得せられた特殊價値の價値感をいよいよ熾烈ならしめる——しかもこの熾烈ならしめられた價値感はその自體またいよいよさきの如き反撥背反の關係を濃厚にする——かういふ過程に擔はれながらこの觀念的なる限界集團は自らの存在をあらゆる側面において具體的ならしめるための努力を試み始める——様々な方向に向つて理念が樹立せられる。様々な方向について歴史的根據がたづねられる——一度樹立せられた理念を目ざしての共同なる意志が成立する、又たづねられた歴史的根據についての價値感情が共同に把持せられる。さきの場合には Nation の概念が成立し、この場合には Volk の概念が生れる——この二類型の何れの場合にせよ、より秩序的なる努力と、より誇示的なる努力とが、共同の意志なり、共同の感情なりの間から、當然に試みられ始める——しかしこれらの努力を有効な努力たらしめるためには、據るべき地盤として政治的獨立が要求せられる。

以上に極めてシエマチツシに書きつらねてみたのは、民族の概念中における政治性の地位についての私自らの推論過程に他ならない。さてこれだけのことから Staatsnation の概念を如何に取扱ふべきかの問題が自ら答へられてくるに違ひない。民族の概念の中に含まれた政治性といふ契機は、民族の掲げる理念のうち政治的統一といふ形で現はされてゐるものに他ならない。この契機なり理念なりは他の諸契機、諸理念と共に本質的、原則的にはいはゞ同權の關係において民族の概念のうちに含まれてゐる。唯現實的意義においてはこの政治性といふ契機、理念が、先づ確保さるべき地盤として、唯これだけの意味において優先する。若しかう考へ

ることが許されるならば *Staatsnation* といふのは民族の一類型を現はすものではなくして民族概念の一契機を誤つて一類型と考へたものにすぎないといはねばならぬ。又クェルレン、フェルス、ハルトマン、ウイザアが *Staatsnation* をもつて民族成長の究極的目標をなすかの如くに考へたのは、一契機にすぎぬものを一類型と考へた誤りの他に、現實的意義における優先性にすぎぬものを本質的意義におけるそれであるかの様に考へ誤つたものといつてよい。又 *Kulturnation* といふのも民族の一契機を示すところの文化的統一といふ理念のみをとり出してこれを獨立なる一類型と考へた結果にすぎない。本質的、原則的にはこの形での理念も他のものと同權的關係において民族の概念のうちに含まれてゐるとみるべきであつてクェルレン等が考へてゐた様に發展史的前段階をなすものとみることが許されない。

又スタアフェンハアゲンについて考へる。彼のいふ精神共同體とプラグマチツシエ共同體の區別は實は精神共同體の二類型を現はしてゐるものにすぎないことは既に指摘した、彼が精神共同體と呼ぶものは形而上的價値に向ふての精神共同體であり、プラグマチツシエ共同體といふのは形而下的價値に向つての精神共同體である。しかもこの精神共同體の二類型は、こと民族に關する限り、民族の二類型を現はすものではなくして、實はその二契機を示してゐるにすぎない。彼がこの「二類型」の相互聯關として敘述したものは、この「二類型」を「純粹社會形態」と考へてゐた彼にとつては、「混合形態<sup>1)</sup>」を示すものとしか思はれなかつたであらうが、われわれにとつて、この「二類型」を二つの契機と考へるわれわれにとつては、様々な契機の間、よつても

1) Stavenhagen, a. a. O., S. 110 f.

つて民族の概念を構成するための、組み合わせの姿を現はしてゐるものにすぎない。マイネツケは *Saatsnation* なくして *Kulturnation* なく、又後者なくして前者が考へ得られない意味のことを、この兩者を二類型と考へてゐた彼としては當然に、唯外面的關係において措定したこと既に紹介しておいたが、これとても、この兩者を二契機と考へる立場にたつわれわれにとつては、相互に本質的關聯にあることがらを誤つて唯外面的にしか眺め得なかつたことを示してゐるといつてよい。